

犠牲愛、しかし全体主義に流されない

最近、アフリカのペンキアートを学びにタンザニアのある村で生活してきたショーゲンさんという方のお話を読みました。彼はその村で生活していた当初、村人から「あなたを見ているとヒヤヒヤする」とよく言われたそうです。その理由は、奉仕の精神が強すぎるからとのことでした。それは私たち日本の社会、またキリスト教という私たちの宗教では良いことのように思われています。しかし、その村では違ったのです。

ある日のこと、両手に買い物かごを重そうに抱えているお母さんを見かけたので、ショーゲンさんは持ってあげようと声をかけました。すると「ショーゲンには手伝ってほしくない」と言われてしまいました。日本では困っている人を見たら助けるように、人に親切にするように教わってきたのに、ここでは断れてしまうことにショーゲンさんは戸惑います。でも、そのお母さんは言いました。「人の心の中には、喜びのグラスというのがあるのよ。自分の喜びのグラスをまず満たして、そこからあふれた時、そのあふれた愛情で、人のためにしてあげたらいいのよ」と。お母さんが言いたかったのは、「一番大事なのは、まず自分を大切にすること。まずは自分の心を満たしてね」ということだったのです。

「自分を絶対に、置いてけぼりにしてはいけないよ」。ショーゲンさんはその村で、そのお母さん以外にも、村長から何度も何度もそう言われました。「一番最初に大切にしないといけないのは、自分だよ。ショーゲンはいつも自分を置き去りにしているように見える。それでショーゲンの魂は喜んでる？自分の魂に失礼なことをしてはいけないよ」。それまではどこか心に余裕がなく、何かを追われているように生きて来たショーゲンさんは、大きなカルチャーショックを受けました。自分自身を蔑ろにしてはいけない。自分の心を満たさない限り、本当の意味で誰かの力になれない、そのことを教わったと言います。

このお話を読んで、私はなるほどと思わされました。と同時に、アフリカのこの村

ではキリスト教の犠牲愛の考え方などを伝えたら、「自分を犠牲にしてまで人に奉仕するなんて、とんでもない！」と言われてしまいそうだなとも思われました。

確かにこの二つの考え方、価値観は矛盾するのかもしれませんが、でも、どちらが正しくて間違っているではなくて、どちらも大事な真理だなと思われたのです。私はキリスト者としてイエス様から教わる犠牲愛の考え方に「アーメン」と頷き、その生き方に従っていこうと考えていますが、アフリカのこの村の人々の考え方もよく分かるし、大切な示唆を与えてくれていると思います。よく推理物の漫画や小説などで「真実の一つ」と言われますが、たしかに真実というのは一つかもしれないけれども、真理というのは「たとえ矛盾するように思われても同時に真」ということがあります。そして、時には「自分を犠牲にして人に仕える」という命題に従うけれども、ある時には「自分を一番に大切にすること」という命題に従うというみたいに、その場その場で臨機応変に自分が信じる真理に従い分けをしていくと言いますか、そのバランスがとても重要だったりするなと思われました。今日はその使い分け、バランスのようなお話になるでしょうか。

先程は二か所、聖書箇所をお読みいただきました。ヨハネによる福音書 12:20～26 とルカによる福音書 15:1～7 です。まずヨハネによる福音書の方を見ていきましょう。何人かのギリシア人たち、すなわち異邦人たちがイエス様に会いにやって来た時のお話です。

イエス様の時代、ユダヤ教の構成員の中心はもちろんユダヤ人でしたが、その周囲にはユダヤ教を信奉する異邦人たちがいたことが知られています。それは異邦人でありながら割礼を受けて、ユダヤ教に帰依した「改宗者」と呼ばれる人々であったり、必ずしも割礼を受けてはいませんでした。ユダヤ教を信奉し、礼拝や聖書を読むこと、律法を尊ぶこと、またユダヤ教の暦を重視してこれを守っていた「神を畏れる人々」と呼ばれる人々であったりしました。

今日の聖書箇所「祭り」というのは過越祭のことですが、この時にエルサレムに巡礼にやって来た「何人かのギリシア人」というのは、先程申し上げた「改宗者」であったのか、「神を畏れる人々」であったのかははっきりしませんが、いずれにしてもユダヤ教を信奉する異邦人であったと思われます。彼らはイエス様に会いたいと願いましたが、直接イエス様に話しかけることはしないで、「ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポ」に仲介を頼みました。それはこのフィリポがギリシア語を話せたからでしょう。フィリポは自分と同じベトサイダ出身のアンデレと相談しまして、二人でイエス様の所に行ってこのギリシア人たちの願いを伝えました。

この時、イエス様は御自分の十字架の時が来たことを察知され、非常に有名な言葉を述べられました。それが24節です。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」イエス様のこの譬えは、農耕生活を営み、特に小麦の栽培をしていたパレスチナ地方においては非常に分かりやすいものだったと言えるでしょう。一粒の麦は、地面に蒔かれることなくそのまま取って置かれたなら一粒のままに留まる。しかし、これが蒔かれて地面に落ちると、当時はそのように考えられていたのですが、この一粒の麦は死ぬが、そこから芽が出て、多くの実を結ぶようになる。これと同じように、イエス様は御自分が十字架で死ぬことによって、多くの人々が永遠の命を与えられ、生かされるようになることを説明されたのです。そして、「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至る。わたしに仕えようとする者は、わたしに従え」と、御自分の犠牲愛の道、永遠の命に至る道に人々を招かれました。

私たちは知っています。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」イエス様のこの御言葉によってどれほど多くの人が励まされ、献身的な働きが生み出され、またたくさんの偉業が成し遂げられてきたかを。この聖句を愛唱聖句として、自らもイエス様と同じように献身の道、犠牲愛の道に生きようとする人々はたくさんおられます。

それはとても素晴らしいと思うのですが、しかし今年のお正月にあるテレビ番組を見まして、犠牲愛というのにも気をつけなければいけないことがあるなど思われました。それはNHKの「100分で名著」という番組のスペシャル版で、「100分 de 宗教論」というテレビ番組だったのですが、その中で国家と宗教について論じるために、ある人が杉本五郎という人の『大義』という本を紹介していたのです。これは仏教の禅にも明るかった軍人・杉本五郎が軍人の生き方と信仰の問題についてまとめた本でして、戦前には130万部のベストセラーとなったと言います。

その第1章は「天皇」で、このように綴られています。「天皇は天照大御神と同一身にましまし、宇宙最高の唯一神、宇宙統治の最高神。天皇は絶対にましまし、自己は無なりの自覚に到らしむるもの、諸道諸学の最大使命なり。天皇の御前には自己は無なり。君民一如の自己尊きにあらず。自己に体现せられたる天皇の尊きなり。天皇は国家のためのものにあらず、国家は天皇のためにあり。唯々身心を捨て果て、更に何物をも望むことなく、只管に天皇に帰一せよ。」天皇は天照大御神と同じ存在であられ、宇宙最高の唯一神であり、宇宙を統治する最高神であられる。天皇は絶対で尊く、その前に自分はまったく無であることを自覚せよ。天皇が国家のためにあるのではなくて、国家が天皇のためにあるのである。ただただ己の身と心を棄て去って、何を望むことなく、ひたすら天皇に帰一せよと呼びかけているんですね。これがベストセラーになるというのは、ある意味では国家神道のピークを窺わせると言ってもよいかもしれません。従来の神道というのは「八百万の神々」という言葉に表されているように、アニミズム的で多神教であるわけですが、日本は明治期以降、天皇を唯一神とする新しい神道を近代国家を作るために人工的に作り出していったわけです。

第2章の「道徳」で杉本はこのように語ります。「天皇の大御心に合ふ如く、『私』を去りて行為する、是れ日本人の道徳なり。天皇の御守護には、老若男女を問はず、貴賤貧富に拘らず、斉しく馳せ参じ、以て死を鴻毛の軽きに比すること、是れ即ち日本人道徳の完成の道なり。天皇の御為めに死すること、是れ即ち道徳完成なり。此の理を換言すれば、天皇の御前には自己は『無』なりとの自覚なり。『無』なるが故に億

兆は一体なり。天皇と同心一体なるが故に、吾々の日々の生活行為は悉く皇作皇業となる。是れ日本人の道德生活なり。」色々と言われていましたが、要するに天皇のために死ぬことが道德の完成であると、このように言うわけです。

この『大義』が戦前において大ベストセラーになり、この価値観に心酔した多くの若者が先の戦争において命を落としました。既に申し上げましたように、こうした杉本五郎の『大義』は、当時の国家神道の思想を如実に表しています。天皇が唯一絶対の現人神であり、皆がこの天皇のために仕える。天皇の前には己は無であり、天皇のために死ぬことが道德の完成である。天皇のために死ねば、靖国で英霊として報われる。戦前、日本はこうした疑似宗教でもって全体主義国家体制を構築していったのでした。

こうした全体主義の体制に当時のキリスト教も取り込まれていってしまったのは、皆さんもご存じのとおりです。1941年に日本のプロテスタント教会は、大東亜戦争遂行のために合同して日本基督教団となりました。その「教団規則」の第七条「生活綱領」にはこうあります。「皇国ノ道ニ従ヒテ信仰ニ徹シ各其分ヲ尽シテ皇運ヲ扶翼シ奉ルベシ。」聖書に従って信仰に徹するのではない。皇国の道に従って信仰に徹する。そして各々がその分を尽くして皇室の運命を助けるのだと、それが日本基督教団の信仰生活の指針だと、こう言うわけです。そして、当時の教団統理の富田満牧師はこの指針通りに皇国の道に従って信仰に徹し、主を畏れつつ伊勢神宮に参拝して、新しい教団の発展を希願しました。さらに1942年10月に出された「日本基督教団戦時布教指針」では、大東亜戦争を「聖戦」と呼んでこう言います。「殊ニ本教団ハ今次大戦勃発直前ニ成立シタルモノニシテ正ニ天業ヲ翼賛シ国家非常時局ヲ克服センガ為ニ天父ノ召命ヲ蒙リタルモノト謂ワザルベカラズ」。つまり日本基督教団は、大東亜戦争に勝利するために神様の召しを受けて成立した団体であると言うのです。そしてこの布教指針の綱領の第一は、「国体ノ本義ニ徹シ大東亜戦争ノ目的完遂ニ邁進スベシ」でした。

私は思います。こうした教えは先程の杉本五郎の『大義』と何が違うのだろうか。

ここではキリスト教が完全に国家神道に取り込まれてしまっています。天皇のために己を無にし、犠牲にし、滅私奉公することが犠牲愛と言い換えられ、天皇のために死ぬことが殉教とされ、天皇の臣民、赤子として忠実に尽くして生きることが神様の御心とされました。

テレビで杉本五郎の『大義』に触れ、さらにこうした戦時下のキリスト教の在り方を振り返って思わされたのは、もともと両者に親和性があったのかなということです。国家神道は疑似宗教であったということは既に申し上げましたが、現人神である天皇のために己を犠牲にする。そうすれば靖国で報われるという思想と、神様のために、その御心のために、また隣人のために己を犠牲にする、そのようにして「この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る」、神の国で報いを受けるという思想、これらはどこか似ています。キリスト教の犠牲愛と全体主義というのは絶対に違うのですけれども、このように一見紛らわしいと言いますか、論理のすり替えがしやすいものであったがゆえに、国家神道という疑似宗教がそうしたロジックを備えていたがゆえに、当時のキリスト教は簡単に犠牲愛、献身というのを全体主義にすりかえて国家神道に迎合していったのではなかったでしょうか。

今現在、戦時下のキリスト教の在り方は神ならぬものを神とした偶像崇拜の過ちとして批判と反省が為されています。それはその通りで、そうした研究がこれからも進めばよいと思うのですが、しかしその中でキリスト教の献身、犠牲愛が天皇、また天皇主義国家体制への滅私奉公へとすり替えられ、全体主義に置き換えられていったようなところがあったのではないかという研究はほとんどないように思います。でもそうしたところはやはりあったと思うんですね。犠牲愛と全体主義って、実は相性が良いのだと思います。全体主義に取り込まれやすい。だからこそ、両者の区別をきっちりつけておかないと、犠牲愛というのをもいつ全体主義に転んでしまうか分からない。そんなことをお正月にテレビを見ていて思わされました。

今は右傾化が進む世の中ですから、キリスト教が過去の過ちを繰り返さないために

も、今日は両者の区別、犠牲愛と全体主義の区別をきっちりつけておきたいと思えます。

さて、では犠牲愛と全体主義はどう違うのでしょうか。そのことを考えた時に頭に浮かんだのが、今日のもう一つの聖書箇所、ルカによる福音書 15:1～7 です。有名な「見失った羊」の譬え。この中でイエス様は言われます。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか」と。

それは常識で考えるならば、ありえない話かもしれません。見失った一匹の羊を捜すために、九十九匹を野原に残して危険な目に遭わせるという選択をいったい誰がするのでしょうか。おそらくこのような状況に置かれたとすれば、大勢の人が九十九匹の安全のために、迷子になった一匹の羊は諦めるという選択をすることでしょう。あるいは、九十九匹の羊の安全を確保してから、迷子になった一匹の羊を捜しに行くのでしょうか。その場合にしても、一匹の羊のことは後回しです。優先すべきは全体のことであり、全体に比べれば迷子の一匹の価値は霞んでしまうというのが私たち人間の常識でしょう。

しかし、神様はそのような考え方を為さらないとイエス様は言われます。イエス様にとって、神様は「九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回」る羊飼いに他なりません。全体のために、個は犠牲になっても構わない、全体のために個は後回しになっても仕方がないという考え方を神様は為さらない。むしろ全体を後回しにしてでも御前に見失われた一人の人の救いを大切になさる、神様はそのような愛情を持って私たち一人ひとりに向き合ってくださいとお方だとイエス様は言うのです。

このお話で示されているのは、一人ひとりを大切になさる神様の愛と、そのように神様に愛された個の尊さに他なりません。「わたしの目にあなたは値高く、貴い(イ

ザヤ書 43:4)。神様は本当に一人ひとりを尊び、一人ひとりにこの上ない愛情を注がれる。そのように神様に愛された存在であるがゆえに、一人ひとりとは全体に埋没することのない尊さを持っている。これほど全体主義に「No!」を突き付ける聖書の箇所が他にあるでしょうか。

キリスト教がイエス様に従う生き方として犠牲愛を説く一方で、このように全体に埋没することのない個人の尊さをも教えていることに私たちは注目しなければなりません。キリスト教では本来、人が己を犠牲にして神様のため、隣人のために仕えても、全体のために、一人ひとりの大切な命が霞んでしまうようなことは神様の御心ではないとして退けられるはずなのです。キリスト教の犠牲愛、それは決して全体のために個が蔑ろにされる、個の尊さが軽んじられるようなものでは決してありません。

しかしここで国家神道、その全体主義の思想を著した杉本五郎の『大義』に話を戻せばどうでしょうか。そこでは「天皇の前には己は無だ。自分の身と心を捨てて天皇のために死ぬ」と盛んに強調されています。天皇の前に、全体の前に、己の価値はまったくないとされるわけです。そしてその思想のもと、人々が紙屑のように命を落としていきました。

この違いを、私たちははっきりと認識しなければなりません。ここがキリスト教の犠牲愛と全体主義の大きな違いです。全体主義はたとえば大東亜共栄圏の建設など、間違った理想、ユートピアの実現のために、一人ひとりの命、その価値が徹底して蔑ろにされます。そして人々を滅亡へと追いやります。それに比べて私たちの宗教は、己を犠牲にして愛に生きること、互いに仕え合って皆で生きることを真理として説きつつも、同時に個人の尊さ、その命の重さをも真理として忘れません。そして人々を救いへと、神の国へと導いていきます。残念ながら戦時下のキリスト教はその区別をきちんとつけることができずに、犠牲愛を全体主義にすり替えて天皇主義という全体主義国家体制に取り込まれていってしまいました。

先程も言いましたように、今は右傾化がどんどん進む世の中です。亡くなった安倍元首相の現憲法への軽視発言、教育勅語の評価、教育現場での国旗・国歌の強制、秘密保護法成立などなど、過去の全体主義の風潮が政治のあちこちで顔を出してきている世の中です。そのような中だからこそ、私たちは自分たちが教えとして持っている犠牲愛と全体主義との区別をはっきりとつけておかなければなりません。

犠牲愛は決して全体のために個が蔑ろにされる教えではない。今日の冒頭のお話に戻るようですが、「自分を犠牲にして人に仕えること」と「神様に愛されてある、かけがえのない価値を持った自分を大切にすること」、この二つは矛盾するかもしれないが同時に真であり、キリスト教はどちらの教えも真理として保持している奥深い宗教です。その強みを私たちは今こそ発揮していかなければなりません。人々のエゴが吹き荒れる愛の冷えた社会、その現場に対しては「自分を犠牲にして人に仕えること」を、強まる全体主義の風潮に対しては個の尊さを、したたかに臨機応変に、バランスよく使い分けして訴えていきましょう。犠牲愛を説き、しかし全体主義には流されないうで、個の尊さをも皆で一緒に光り輝かせていきたいと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——